

みづなかオペラ《ラ・ファヴォリー タ》

ドニゼッティの一味変わったセリア劇を、牧村邦彦指揮ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、演出・井原広樹で上演。舞台はアルフォンソ11世（藤村匡人）時代のスペイン。修道士フェルナンド（藤田卓也）が王の愛人レオノーラ（並河寿美）に思いを寄せたことから始まる宮廷悲劇だ。修道院長バルダッサレ（片桐直樹）はフェルナンドの父で、またアルフォンソ王妃（登場しない）の父でもあるというドロドロした人物関係の中で話は展開する。教権（バルダッサレ）と王権の対立やレオノーラの侍女イネス（小梶史絵）の処刑、事態に気づかないフェルナンドを取り巻いて厳しく誹謗する王の側近ドン・ガスパロ（小林峻）ら騎士団などのシーンは典型的なバロック悲劇の配置だが、オペラの筋立てや音楽はむしろ愛を讃える近代的なロマン劇的に構成されている。物語や人物描写が問題に満ちている反面、オケや歌唱陣の表現力は豊かであり、演出も巧みだ。その複雑な二律背反に悩まされながら拍手を送った。（9月24日・川西市みづなかホール）

◆
〈嶋田邦雄〉